

『実学報』日本語翻訳記事の新漢字語

—『日本国語大辞典』における初出用例との比較—

秦 春 芳

(2007年10月4日受理)

New Words Written in Chinese Characters in *Jitsugakuhō's* Translated Japanese Articles
— Comparison with the first examples in the Nihon Kokugo Daijiten —

Qin Chunfang

Abstract. In the modern age, resulting from the translation of Western languages into Japanese language by Japanese scholars in Edo and Meiji Era, a large number of new words written in Chinese characters have been created in Japan. So far, those achievements were considered as important references for dictionary descriptions. Meanwhile, although the Nihon Kokugo Daijiten (The Great Dictionary of the Japanese Language) delicately kept a record of those new words appearing in newspapers, magazines or periodicals during the Meiji Era in its quotations, it is still difficult to state that a complete investigation and collection have been conducted. In this paper, the new Japanese words written in Chinese characters from a translation of Japanese articles in Meiji Era appearing in the Chinese periodical *Jitsugakuhō* were taken up. Then, the contents of the original texts in the Meiji Era newspaper articles were compared with the corresponding quotations of the Nihon Kokugo Daijiten. As a result, among the 30 words investigated, 26 words were found to be more ancient in the Meiji Era newspaper compared to that of the Nihon Kokugo Daijiten. Moreover, 4 words used as examples in the Meiji Era newspaper were not listed in the Nihon Kokugo Daijiten. Those two key points are essential findings of the present study.

Key words: new Chinese character word, Meiji Era newspaper, Nihon Kokugo Daijiten, first example in the dictionary

キーワード：新漢字語，明治期の新聞，『日本国語大辞典』，初出用例

0. はじめに

中国，日本，韓国などの漢字文化圏において，中国は長い間，漢字文化，儒教文化の輸出国として，そして，仏教文化の伝達国として重要な役割を果たしてきた。19世紀に入ると，「西学東漸」という言葉のとおり，

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：町 博光（主任指導教員），多和田真一郎，
縫部義憲，佐々木勇

西洋の近代文明が東洋へと浸透していく。この新しい文明の受け入れは，物質的な面から東洋の人々の生活を変えただけではなく，価値観など精神的な面や言語の領域にも影響を及ぼした。幕末，明治期の日本の学者たちは，近代西洋の人文・自然科学の概念の翻訳と導入に大いに力を注いだ。近代新概念の日本語訳語の創出にあたって，彼らは，中国語の古典，近世の白話小説¹⁾，日本より少し早い時期にできた漢訳洋学書（英華・華英辞典類を含む）からの借用以外に，自らの努力によって，既存語との置き換え，音訳，新たな造語などの方法を用いて近代の新漢字語²⁾の体系を整えた

(陳1997, 高野2004, 真田2007)。新漢字語を含んだ近代語に関する研究として、広田(1969)、佐藤(1986)、杉本(1998)、森岡(1991)、沈(1994)、荒川(1997)、陳(2001)、真田(2002)、田島(2003)、朱(2003)、高野(2004)など、一連の論文・著書が挙げられる。

1. 問題提起と本稿の目的

19世紀に入ってから、清朝政府は国力が衰えていき、日清戦争(1894~95)をきっかけに、近代化によって国家の強化を実現させた日本を通して近代文明を導入する政策を採った。その近代文明を輸入する媒体となった翻訳書や新聞などの一つとして、『実学報』が挙げられる。筆者は、『実学報』における日本語からの翻訳記事を通じて中国語に導入された新漢字語の性格について明らかにしたいと考える。

本研究を展開していく過程の中の一手順として、記事から抽出した語³⁾の『日本国語大辞典 第二版』(以下『日国』と略す)と『精選版 日本国語大辞典 全三巻』(以下『精選版 日国』と略す)における情報を確認する作業を行った。その作業を進めているうちに、同語⁴⁾で、翻訳記事の原本となる日本の明治期の新聞における記述が『日国』『精選版 日国』に掲載されている初出用例よりも古い年代となっている、もしくは、『日国』『精選版 日国』において初出に関する情報が記述されていないということがあることが明らかになった。

『日国』は、「上代から現代に至る日本語の歴史を確実な文献によって跡づけた本格的な国語大辞典として、国語国文学界のみならず各界より高い評価を得て、海外においても日本語の研究には欠かせぬ基本的な資料となるに至って」(『日国』の「第二版・刊行のこぼし」による)おり、その「用例文は、文学作品やいわゆる国語資料のみに限らず、広くさまざまな分野の歴史的な文献からも採録」し、「文献は、上代から明治・大正・昭和に及ぶ」(『日国』の「凡例」による)。これから用例を網羅的に収録する編集方針が窺える。更に、採用する典拠・用例は、「(イ) その語、または語釈を分けた場合は、その意味・用法について、もっとも古いと思われるもの」で(『日国』の「凡例」による)、『精選版 日国』では、『日国』には収録されなかった項目は約千五百語、用例は約五千例新たに収録されているという(『精選版 日国』の「発刊にあたって」による)。2007年7月より「日国 Online」(にっこく・オンライン)サービスが開始し、それに伴って利用者の更なる増加が予想できる。

本稿は、明治期の新聞における新漢字語の使用例が

『日国』『精選版 日国』における初出用例よりも早いという事実を指摘するものであるが、結果的には『日国』の今後の用例訂正・増補に候補を提示し、その語の語誌記述の参考情報を提供することにもなる。

2. 『実学報』と日本語記事の翻訳記事欄

2.1 『実学報』について

日清戦争(1894~95)後、日本の明治維新に倣って維新を唱える中国の維新人士は、新思想を広めるために、全国各地で学会⁵⁾を創設し、『中外紀聞』『時務報』など多くの定期刊行物を発行した。この時期の定期刊行物は、中国の「民報勃興」のスタートを切り、当時の学会と一体になって、知識人の思想啓蒙・解放を促しただけでなく、その後の中国の社会、政治、文化、教育、出版にも大きな影響を与えた。『実学報』(1897. 8~1898. 1)はこのような時代的背景の下で出版された多くの定期刊行物の中の一つである。同時期に刊行された多くの定期刊行物と比べると、『実学報』を調査対象とすることには以下4点の利点がある。

- (1) 同時期の他の定期刊行物(『知新報』(1897~1901)『国聞報』(1897~1900)等)が日本の新聞などよりは西洋の新聞などを翻訳することに重きを置いているのに対して、『実学報』の場合、編集者側は西洋以外に日本をも近代文明の大事な「輸出国」として認識し、日本、そして日本語を通じて新しい文明を取り入れようとしている。
- (2) 『実学報』の翻訳記事欄は日本の新聞記事をニュースソースとして翻訳作業が行われたため、言葉遣いの面では他の定期刊行物より、直接、日本語特に漢字表記語の影響を受けている可能性が高い。
- (3) 翻訳記事の出典が明確である。翻訳記事のニュースソースとなる日本の情報源一記事が掲載されている新聞と発行年月日一が示されているため、原本と付き合わせることができる。よって、より正確な考察結果が得られると考えられる。
- (4) 沈 1998における記述⁶⁾から、日本の新聞記事を土台にした中国の定期刊行物の中で、『実学報』は比較的早い時期のものだと考えられる。

『実学報』は「以講求學問、考覈名実為主義、博采通論、広訳各報」(湯1993, p.439)を趣旨とし、上論、実学と関係がある章奏を採録し、それ以外の内容を天学、地学、人学、物理学の四部類に分けた学術的な刊行物である。紙面構成においては、『実学報』は終始あまり変化がなく、概ね、実学平議、実学通論、論旨、章奏彙編、英報輯訳、東報輯訳、法文書訳⁷⁾、実学報館文編というようになっている。実学報館文編の欄で

は数多くのヨーロッパと中国の書籍が紹介されている。このように世界情勢や外国語記事を翻訳したものが掲載されている『実学報』は、中国の主要都市及び海外にまで販路を広げ、知識人と、ある程度教育を受けて漢文の知識を持つ人の中で広く読まれていたと関係資料から推測できる。

2.2 日本語記事の翻訳記事欄「東報輯訳」・「東報訳補」とその原本となる日本の新聞

原本となる日本の新聞の名称（五十音順）	記事数（編）
大阪朝日新聞	35
大阪朝日新報	1
大阪時事新報	2
大阪毎日新聞	8
経済雑誌	1
神戸又新日報	5
時事新報	33
中外商業新報	12
中外商業報	1
東京経済雑誌	8
東京電報	3
東京日日新聞	23
東京日日新報	2
東京日日報	1
日本銀行半季報	1
日本報	1
計 16（種）	計 138 ⁸⁾ （編）

（上掲の表は『実学報』の翻訳記事に記されている出自に基づいて作成したものである。斜体になっている「大阪朝日新報」、「中外商業報」はそれぞれ「大阪朝日新聞」「中外商業新報」の誤りであることが調査で明らかになった。したがって、実際の新聞の種類は14種になる。）

上掲の表に見るように、『実学報』は前後に「東報輯訳」⁹⁾と「東報訳補」¹⁰⁾の二つの欄を設けて、日本から新しい情報を中国に導入し、購読者に提供している。第九冊から更に「東報訳補」が出現していることは、「以鑿聞報諸君之望」（『実学報』p.580）との記述からも分かるように、当時の購読者の要望と社会的要請を鮮明に反映している。『実学報』では、合わせて14種類の日本語新聞から138編の記事が選出され、翻

訳、紹介されている。その中で、多い順に見ると、「大阪朝日新聞」「時事新報」「東京日日新聞」の3種類の新聞の記事をニュースソースとした翻訳記事が92編であって、翻訳記事全体の66%を占めている。『実学報』がこの3種類の新聞に注目したのは、この3種類の新聞の日本における影響力が大きかったからなのか、それとも、翻訳者（或いは編集者側）にとって入手が比較的容易であったからなのかは、当時の日本新聞界の事情などを調査し、検証を行う必要がある。なお、本稿では、このことについては立ち入らない。

また、翻訳記事の内容は、経済、政治、外交、教育、交通、軍事、貿易、外交、鉱産物など多岐に渡っており、しかも、世界各国に関する情報が含まれている。ここから、近代的要素が多く含まれた日本の記事を通して近代文明を導入し、中国の近代化を目指そうとするという編集者の意図が見て取れる。前述のように、いずれも、翻訳記事のニュースソースとなる日本の情報源—記事が掲載されている新聞と発行年月日—が示されているため、原本と付き合わせることができる。

3. 明治期の新聞における記述と『日国』における初出用例との比較

3.1 調査対象語

『実学報』の日本の新聞からの翻訳記事138編中40編から抽出した漢字語のうち、731語¹¹⁾が原本の日本語記事と中国語翻訳記事の両方に出現している。この731語を見出し語として『日国』『精選版 日国』における記述内容について調査したところ、26語は明治期の新聞における記述が『日国』『精選版 日国』の初出用例より早く見られ、4語は明治の新概念語として、『日国』『精選版 日国』において見出し語としては挙げられているが、用例が掲載されていないということが明らかになった。合わせて30語が明治期の新聞に出現していることから考えると、当時の社会において広い範囲で使用されていたかどうかは断言できないものの、当時の日本語に存在し、しかも、ある程度民衆の間で認知されていたということが言えよう。本稿では、この30語を調査対象とした。具体的には次の通りである。

●『日国』『精選版 日国』に挙げられている初出用例より明治期の新聞での記述が早い語：26語

ア行：印刷物 温室

カ行：禍害 角形 上半期 寄贈 協商 極限 軍部
訓練 交渉 後任

サ行：死傷者 市民 縦貫 首相 主任者 署長 市
立 精米所 染織

ハ行：抜剣 病院長 防風

ラ行：緑茶 連絡

●『日国』『精選版 日国』において見出し語としては挙げられているが、用例が挙げられていない語：4語

カ行：技監 玉茶

タ行：鑄鉄管 通信

3.2 明治期の新聞における記述と『日国』における初出用例との比較

上記の30語は、明治期の新聞ではどのような文脈でどのように使用されているか、また、『日国』『精選版 日国』ではどのような用例記述になっているか、更に両方の文脈における語を同語と判断するのが妥当なのかどうかについて、それぞれの面から比較・分析を行いたい。以下、筆者が各語の新聞記事での意味に当たると判断した『日国』『精選版 日国』における語釈¹²⁾、『日国』『精選版 日国』における初出情報、明治期の新聞における記述の順に該当語ごとに具体的な情報を示す。

3.2.1 『日国』『精選版 日国』に挙げられている初出用例より明治期の新聞での記述が早い語

(1) 印刷物

語釈：文書、書籍など印刷されたものの総称。刷りもの。いんさつもの。

『日国』における初出用例の情報：郵便法(明治三三年)(1900)一八条

印刷物

『東京日日新聞』(1897.9.17)の「商業博物館の創設」という記事における記述¹³⁾：

博物館總裁は殊に船舶、小銃、電気機械、車輛、風車、織機、印刷物の雛形、寫眞、圖畫の送致を希望せり

(2) 温室(おんしつ)¹⁴⁾

語釈：③植物を寒さから保護したり、開花、結実の促成や抑制を目的とした建物。ガラスやビニールで囲い、ふつう暖房装置を備える。明治初期に移入され、中期以後広まった。《季・冬》

『日国』における初出用例の情報：風俗画報—二七三号(1901)土木門

欧米諸国に於ける所謂温室(ランシツ)なるものが『時事新報』(1897.9.26)の「臺灣の植物(上)」という記事における記述：

若くは毒樹と云はれて無情の手に叩き折らるゝアラサングの温室に養はれ自由自在に生長するなど

(3) 禍害(かがい)

語釈：わざわい。災難。不幸。禍災。

『日国』における初出用例の情報：大塩平八郎(1914) <森鷗外>九

残賊を誅して禍害(クワガイ)を絶つと云ふ事『東京日日新聞』(1897.9.17)の「呂宋島噴火山の爆裂」という記事における記述：

本年は六月二十六日以来溶石及熱灰を噴出すること非常にして頗る遠隔の場所に迄其禍害を及ぼし

(4) 角形(かくがた)

語釈：角ばった形。方形。かくなり。

『日国』における初出用例の情報：倫敦塔(1905) <夏目漱石>

模様は、<略>頗る単純の直線を並べて角形に組み合はしたものに過ぎぬ

『大阪朝日新聞』(1897.9.16)の「大學談」という記事における記述：

制帽は依然として角形なりと雖も其精神たる全然海鼠の如く

(5) 上半期(かみはんき)

語釈：会計年度などで、一年を二期に分けたうちの前半分の期間。また、ある一定の期間を二分した前の方の時期。上期。上半(かみはん)。↔下半期

『日国』における初出用例の情報：日本の下層社会(1899) <横山源之助>三・一・三

最も絹織物の繁忙を致せる昨年の上半期

『大阪朝日新聞』(1897.9.22)の「造船工業」という記事における記述：

三菱造船所に於ける本年上半期間の工業景況左の如し

(6) 寄贈(きぞう)

語釈：(「きそう」とも)金銭や品物をおくり与えること。贈呈。贈与。進呈。

『日国』における初出用例の情報：東京朝日新聞—明治三八年(1905)四月一日

又同会に対する内地同情者の寄贈金額は数千円に上り

『大阪朝日新聞』(1897.8.24)の「臺灣學生」という記事における記述：

一同は此處にて撮影をなし尚嵯峨村有志者よりも菓子類を寄贈せられ水泳観覧の後晩刻旅館に歸れり

(7) 協 商

語釈：②（フランス entente の訳語）二国または数国間において、係争点を調整し、友好関係を樹立するための協定。

『日国』における初出用例の情報：東京朝日新聞－明治三十七年（1904）三月二四日

我憂慮の因たる問題を解決すべき一の協商を、露国と締結するを期し

『大阪朝日新聞』（1897.9.16）の「日露協商」という記事における記述：

日露協商

(8) 極限（きょくげん）

語釈：②物事の限度ぎりぎりの所。

『日国』における初出用例の情報：なよたけ（1946）<加藤道夫>第一幕

恋とは夢だ。…『夢』とは全き放心だ。その正しい極限では一切が虚無となる

『時事新報』（1897.9.26）の「臺灣の植物（上）」という記事における記述：

其臺灣にあるものは此樹生育の最北方極限ならん乎

(9) 軍部（ぐんぶ）

語釈：軍（陸・海・空軍）に所属する諸機関の総称。

軍の当局。また、政府・民間に対する軍人勢力。

『日国』における初出用例の情報：統監府告示第七一号－明治四二年（1909）七月三十一日・一条

軍部を廢し宮中に親衛府を置く

『大阪朝日新聞』（1897.9.16）の「日露協商」という記事における記述：

當初露国公使に對して軍人招聘の周旋を依頼したる軍部大臣閔種默を辭職せしめし以來軍部大臣を缺員として日露兩國公使より交渉の煩を避け

(10) 訓練（くんれん）¹⁵⁾

語釈：②軍隊や工場などでの実地教育の総称。また、軍事教練などの類。

『日国』における初出用例の情報：真空地帯（1952）<野間宏>六・一

彼は訓練に於ても学課に於ても、別によい成績をとろうとはしなかった

『大阪朝日新聞』（1897.9.16）の「全權會合」という記事における記述：

露國政府の意見は韓兵訓練の權利は當然露國の占有する所にして

(11) 交渉（こうしょう）

語釈：①ある事柄を取り決めようとして、相手と話し合うこと。かけあうこと。かけあい。談判。

『日国』における初出用例の情報：露国に対する宣戦の詔勅－明治三十七年（1904）二月一〇日

帝國が平和の交渉に依り求めむとしたる將來の保障

『大阪朝日新聞』（1897.9.19）の「露清銀行」という記事における記述：

曾て露都の同銀行本店と烏港上海兩支店との間に交渉する所ありて終に其議纏り愈支店を設置すること、なれるも

『大阪朝日新聞』（1897.9.16）の「日露協商」という記事における記述：

日露兩國公使より交渉の煩を避け

(12) 後任（こうにん）

語釈：前任者に代わりその任務につくこと。また、その人。

『日国』における初出用例の情報：思出の記（1900－01）<徳富蘆花>三・一八

駒井先生の後任と仮りに定められた

『神戸又新日報』（1897.8.21）の「高等師範學校長更迭」という記事における記述：

高等師範學校長加納治五郎氏は非職仰付られ河内山口縣尋常師範學校長其後任となる

(13) 死傷者（ししょうしゃ）

語釈：死者と負傷者。

『日国』における初出用例の情報：官報－明治三十七年（1904）五月二九日

敵の猛烈なる瞰射と側射に依り多数の死傷者を生じて前進を継続することを得ず

『時事新報』（1897.9.7）の「人夫二千名の大暴動」という記事における記述：

細民二千餘名亂入し家屋を破毀し遂に数名の死傷者を出したる詳報を記さんに

(14) 市民（しみん）

語釈：②行政区画の市に居住する人。市の住民。

『日国』における初出用例の情報：一年有半（1901）<中江兆民>附録・市会の商業

東京市会の腐壞は、東京市民の罪也、帝國議會の腐壞は、國民の罪也

『時事新報』（1897.9.8）の「佛國大統領の露帝訪問」という記事における記述：

優渥なる禮遇を受け市民一般佛人を迎ふるの状恰

も狂せるが如くなりし由はロイテル電報に見えたる所にて

(15) 縦貫 (じゅうかん)

語釈：物をたてに、あるいはその長辺にしたがった方向で貫くこと。また、南北に通ずること。↔横貫。

『日国』における初出用例の情報：灰燼 (1911-12) <森鷗外>一三

二人は墓地の真ん中を縦貫してゐる、少々広い道に出た

『時事新報』(1897.9.9)の「臺灣輕便鐵道の着手」という記事における記述：

最初の目的たる臺灣の南北を縦貫するを得べく

(16) 首相 (しゅしょう)

語釈：②内閣総理大臣の通称。首班である大臣。

『日国』における初出用例の情報：英和外交商業字彙 (1900) <篠野乙次郎>

Premier 首相, 内閣総理大臣

『大阪朝日新聞』(1897.8.24)の「新無條約國」という記事における記述：

七月七日英國植民地首相等植民大臣チャンバラエ氏と第二回會議の末

(17) 主任者 (しゅにんしゃ)

語釈：主としてその任にあたるもの。主任。

『日国』における初出用例の情報：内閣所属職員官制 (明治三一年) (1898) 五条・五

統計主任者の招集

『時事新報』(1897.9.9)の「臺灣輕便鐵道の着手」という記事における記述：

右敷設工事の主任者たる加藤陸軍工兵少佐は数日前渡臺したりと云ふ

(18) 署長 (しよちょう)

語釈：警察署、消防署、税務署など、「署」という名称のついている役所の長。

『日国』における初出用例の情報：税関官制 (明治三二年) (1899) 一六条

税関監視署に署長一人を置く

『大阪朝日新聞』(1897.8.24)の「臺灣學生」という記事における記述：

田中署長は日本刀の功用及劍道に係る演説を爲し且自から擊劍の形を演じて其使用法を説き

『大阪毎日新聞』(1897.9.1)の「臺灣林圯埔附近の木材 (頗る多し)」という記事における記述：

林圯埔撫墾署長齋藤音作氏は小倉嘉義縣知事の命を受けて同地附近の山中にある木材を調査することとなり

(19) 市立 (しりつ)

語釈：市が設立し管理、維持すること。また、その施設や学校。いちりつ。

『日国』における初出用例の情報：小学校令 (明治三三年) (1900) 九条

市立尋常小学校の校数並位置は

『大阪朝日新聞』(1897.8.24)の「臺灣學生」という記事における記述：

昨日は市立美術學校、染織學校を觀夫より東本願寺に抵り

(20) 精米所 (せいまいじょ)

語釈：玄米について白くする所。また、それを業とする家。精米場。

『日国』における初出用例の情報：南国記 (1910) <竹越与三郎>六・八領に於ける支那人

此地方の産物は米を大宗とし、而して提岸は運河によりて土産を集散する中心市場にして、運河の兩岸、大小の精米所林立す

『時事新報』(1897.9.7)の「人夫二千名の大暴動」という記事における記述：

遂に河野精米所破壊の事に一決したり

(21) 染織 (せんしょく)

語釈：布を染めることと織ること。

『日国』における初出用例の情報：丸善と三越 (1920) <寺田寅彦>

呉服の地質の種類や品位については全く無知識な自分も、染織の色彩や図案に対しては多少の興味がある

『大阪朝日新聞』(1897.8.24)の「臺灣學生」という記事における記述：

昨日は市立美術學校、染織學校を觀夫より東本願寺に抵り

(22) 抜劍 (ばっけん)

語釈：劍を鞘 (さや) から抜き放つこと。また、その劍。

『日国』における初出用例の情報：妾の半生涯 (1904) <福田英子>六・二

場の内外一方ならず騷擾し、表門警護の看守巡查は、孰 (いづ) れも抜劍 (バッケン) にて非常を戒しめし程なりき

『時事新報』(1897.9.7)の「人夫二千名の大暴動」という記事における記述：

- ①憲兵は發炮し警官拔劍
- ②警官憲兵は再び拔劍發炮して数人に傷を負はせ僅かに退散せしめたり

(23) 病院長 (びょういんちょう)

語釈：病院の長。病院の最高職。院長。

『日国』における初出用例の情報：独身(1910) <森鷗外>二

一人は富田といふ市病院長で、東京大学を卒業してから、此土地へ来て洋行の費用を貯へてゐるのである

『時事新報』(1897.9.7)の「牛馬その他の恐水病」という記事における記述：

東京家畜病院長與倉氏が恐水病の種類及び其症状に就き此程同院講堂にて演説したる其筆記の中より

(24) 防風 (ぼうふう)

語釈：①風を防ぐこと。ぼうふう。

『日国』における初出用例の情報：作戦要務令(1939)一・三〇六

休憩の爲には成るべく防風及給水特に馬の水与に便なる地を選び

『時事新報』(1897.9.26)の「臺灣の植物(上)」という記事における記述：

諸種の植物例へば日蔭用、防風用、薪材用、菓實用、牧畜用等夫れ、¹⁶⁾適當の樹木を擇んで試育するの策あり

(25) 緑茶

語釈：茶の若葉を蒸し、火にかけて乾かしながら揉(も)んだもの。煎茶(せんちゃ)・碾茶(ひきちゃ)など普通日本で飲む茶。紅茶に対していう。

『日国』における初出用例の情報：英和商業新辞彙(1904) <田中・中川・伊丹>

Green Tea 緑茶

『神戸又新日報』(1897.8.24)の「製茶輸出」という記事における記述：

又去廿二日シャートルへ向け出港せし鹿兒島丸にて前報後輸出せしは
シカゴへ 緑茶 四万〇五百斤 九十二番

(26) 連絡 (れんらく)

語釈：④二地点の間が互いに相通じていること。また、

別々の交通機関が一地点で接続していること。

『精選版 日国』における初出用例の情報：雑囊(1914) <桜井忠温>三三

此の停車場からは白耳義シノの方へ連絡ツグしないといふので

『大阪朝日新聞』(1897.8.24)の「鐵道開通」という記事における記述：

徳山以西海陸の連絡を圖ること、なりたるを以て『時事新報』(1897.9.9)の「臺灣輕便鐵道の着手」という記事における記述：

既設線のあるあれば嘉義彰化間にして連絡することを得ば

『時事新報』(1897.9.11)の「支那の西伯利連絡線」という記事における記述：

西伯利鐵道へ連絡を通せんと

3.2.2 明治の新概念語として『日国』『精選版 日国』において用例が挙げられていない語

(1) 技監

語釈：技術をつかさどる最高級の国家公務員。古くは技手、技師の上級にある官名であり、現在では技官の特別の職名とされる。

『神戸又新日報』(1897.8.21)の「叙任及辭令」という記事における記述：

正四位勲二等工學博士 松本莊一郎
任鐵道作業局長官兼通信省鐵道局長通信技監

(2) 玉茶

語釈：緑茶の一種で、丸く平たくひねったもの。たまちゃ。

『神戸又新日報』(1897.8.24)の「製茶輸出」という記事における記述：

又去二十日蘇士海峽を経て紐育へ向け出港したる英汽船バサン號にて前報後輸出せしは
紐育へ 緑茶 一万一千六百卅二斤 廿六番
(中略)
同 玉茶 一千百六十五斤 同

(3) 鑄鉄管 (ちゅうてつかん)

語釈：鑄鉄で造った管。水道・ガスなどの導管に用いられた。

『大阪朝日新聞』(1897.9.22)の「造船工業」という記事における記述：

同社各礦山用鑄鐵管の製造千六百噸餘にして

(4) 通信

語釈：②郵便、電信などの事務。

『神戸又新日報』（1897.8.21）の「叙任及辭令」という記事における記述：

正四位勲二等工學博士 松本莊一郎

任鐵道作業局長官兼通信省鐵道局長通信技監

3.2.3 考察

以上、調査対象語30語について具体的な情報を示した。少し分かりにくい語もあるものの（例えば、3.2.1の「印刷物」）、以上に示した実例を相互に辿って見ていくことによって、30語の各々の使用状況は一目瞭然であり、これらの語の語義は明治期新聞と『日国』『精選版 日国』の両方にあてはまることは明らかであろう。

したがって、以上で指摘した、同語と判断できる26語については、『日国』『精選版 日国』で掲げられている初出用例文よりも、明治期の新聞における各々の使用例のほうが古いことが明らかになり、『日国』『精選版 日国』に収録されている初出用例の年代が繰り上げられることになる。繰り上げられる年数は語ごとに異なるが、それぞれ20年以上は4語（「染織（23年）」「防風（42年）」「極限（49年）」「訓練（55年）」）で、20年以内は6語で、10年以内は16語ある。また、『日国』『精選版 日国』において出典・用例文が掲載されていない4語については、明治期新聞に使用された明確な用例が見られ、これらの用例は当該語の『日国』における初出例としての用例の候補になるということになる。

以上30語について考察し、得られた結果から見ると、『実学報』はそれらの語が中国語に入る媒体としての役割を果たしていたことが分かる。各語は明治期の新聞に使用例があるものの、『日国』に採用されていないということは、当時、それらの語は日本で広く使用されていなかった、すなわち、流行せず、定着しなかったため、その時代の文学作品などにも多く現れていなかったことを示しているのではないだろうか。一方、『実学報』の日本語翻訳記事は日本語記事の新漢字語を積極的に取り入れている。このことから、当時の日本と中国での使用状況の差異は本稿での調査によって明らかになったと言える。明治期の新聞における使用例は『日国』で用例文として取り上げられていないが、忠実に日本語の記事を翻訳した『実学報』の記事の原本である明治期の新聞を調査することによって、『日国』の初出用例よりも古い用例があることが確認でき、当時の日本語の真の姿を垣間見ることができたとも考えられる。

なお、各語が『実学報』の翻訳記事を通じて中国語に入った時点及びその後の使用状況も視野に入れて考察を行うべきだと考えるが、それは今後の課題としたい。

4. おわりに

近代に入って日本の幕末・明治期の学者たちによって新たに西欧語の翻訳語として所謂新漢字語が多数作成された。これらの新漢字語の借用関係についての研究が日本側だけでなく中国側からも関心が高まっている。

これらの新漢字語の成立に関する日本側の辞書的記述は、幕末・明治期の学者の著作が従来重要な文献として扱われ、『日国』の初出用例文にもその中から採録されたものが多い。一方、『日国』は用例収集にあたって、明治期の新聞・雑誌などの定期刊行物も対象としているが、その調査や収集範囲の広さはまだ十分とは言えない。

本稿は、中国定期刊行物『実学報』の日本語からの翻訳記事に出現する明治期新漢字語を取り上げ、その語の翻訳記事の原本となる明治期の新聞における記述の内容と『日国』『精選版 日国』における初出用例の文脈について比較・考察を行った。その結果、次の2点が明らかになった。

- (1) 調査対象語となった30語のうち、26語は翻訳記事の原本となる日本語記事における用例と『日国』『精選版 日国』における初出用例の両方において同じ意味として使用された同語であるが、各語の『日国』で提示されている初出文献より年代的に早い明治期の新聞における記述が『日国』『精選版 日国』において初出用例として挙げられていない。本稿では、『日国』『精選版 日国』で掲げられている初出用例文よりも明治期の新聞における各々の用例のほうが古いといった事実を指摘する。
- (2) そして、4語は明治三十年の日本の新聞記事に使用例が見られるが、『日国』『精選版 日本』においては出典・用例文が掲載されていない。

韓国側の資料を扱った先行研究（白2006）においては、同語で、しかも明治期の新聞における出現が『日国』の初出用例における出現よりも早い語として、24語¹⁷⁾を挙げている。本稿では『実学報』を対象に調査を行うことによって、明治期新漢字語の『日国』『精選版 日国』における初出用例の情報を更新し、その初出年代を繰り上げるものとして、更に「温室」「首相」など26語が増えることになる。これは正に、福沢諭吉、

西周、井上哲次郎等の学者以外に、当時の新聞記事の執筆者も明治新漢字語の作成者或いは使用者として重要な役割を果たしたことを示唆しているのであろう。

語彙に関する研究は、時間的労力的制限のため、全ての文献・資料を拾い上げることがなかなか困難なことである。より精確な情報を利用者に提供することを求め、『日国』は、2002年よりインターネットを通じて、日本の国語辞典での初めての「用例の一般公募」を試みている。これは、辞書学的研究における用例収集の難しさを如実に物語っていると言えるが、筆者の今回の調査研究の結果は、近代日本語についての研究の場合、明治期の新聞が重要な位置にあり、それについてのより綿密な調査の必要があることを示唆するものである。

【注】

- 1) 中国で口語体によって書かれた小説。
- 2) 本稿では、中国語における漢語と日本語における和語に対していう漢語（「手続」等も含む）の両方を含む。
- 3) 語を翻訳記事から抽出する際、基本的には二字漢字語を抽出する。なお、語の意味構成にも配慮し、意味上で分割不可能、或いは一語と見なすしかない場合は、三字、四字の漢字語も対象に入れる。また、固有名詞（地名、人名、国名など）、接頭辞、接尾辞の付加した語（此日、彼国、担当者など）、数詞、助数詞（一月、三本など）が含まれる語は調査対象範囲から除外する。語を抽出する段階では、語形・字面のみ注目するが、調査対象語を絞る段階では、まず、抽出された各々の語が『日本国語大辞典 第二版』（2000～2002）『漢語大辞典 第二版』（2001）『辞源』（1908～1915）などにおいて、見出し語として掲載されているかどうかを確認する。この段階で、日中の片方にしか出現しない語は調査対象から除外す。次に、日本語記事と中国語の翻訳記事における意味について考察を行う。この段階で、文脈における意味のズレが生じた語と誤訳の語は除外する。上記のような手順を踏まえて、調査対象語の全体をまとめる。
- 4) 本稿では、語形からだけでなく、文脈における意味からも同じ語と判断できる語を指す。
- 5) この時期の学会は、中国近代において最も早く誕生した政治団体であり、最初の学術組織でもある。
- 6) 同報告書に、「本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」が最初であった」という指摘が見られる。

- 7) 英報、東報、法文の部分は、イギリス・日本・フランスの書物或いは新聞の翻訳となっている。
- 8) 記事の合計数は138であるが、その中で「下議院議長更迭」という記事は出典不明である。
- 9) 第二～十一冊。巻二まで。第三冊が四ページで、第六冊が六ページであるのを除いて、五ページずつという紙幅になっている。
- 10) 第九～十四冊。巻一のみ。第九～十一冊は三ページずつで、第十二冊は八ページ、第十三、十四冊は四ページという紙幅になっている。
- 11) 『日国』『精選版 日国』において見出し語として掲載されていない語：「科門」「黄梨」「胡膜」「唇部」「数名」「定風」「蕃椒」「表証」「撫壘」「粉茶」「葉心」「督辦」「烈疽」
- 12) 紙幅の都合上、ここではこの一つの語積だけを取り上げる。また、①②③などの番号は、当該見出し語の『日国』における語積項目の番号を示す。番号がない語の場合は、当該語の『日国』における語積項目が一つしかないということを示す。
- 13) 明治期新聞における用例は、当時の用字や仮名遣いを忠実に反映するために、歴史仮名遣いを用いて原文通りに書き出している。
- 14) 語の後に付加されている読みは日本語の原本記事における読み方であり、読みやすさに配慮して現代仮名遣いを使用している。なお、読みが付加されていない場合は、原本記事に読み方が記述されていないということの意味する。
- 15) 沈1998によると、『日本新報』（1897.6.20）の記事に出現しているという。
- 16) 原本は、縦書きになっており、繰り返しの部分は長めの記号となっている。
- 17) 「海員」「快夢」「救難」「警務」「嫉視」「実習」「進水」「信頼」「正装」「全線」「増資」「増発」「属領」「耐火」「打電」「調弁」「直通」「碇繫」「電文」「突堤」「入渠」「敏腕」「予測」「料金」（配列は五十音順に並べてある）

【参考文献】

- 広田栄太郎（1969）『近代訳語考』東京堂出版
 佐藤亨（1986）『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社
 中華書局編輯部（1991）『実学報』（中国近代期刊彙刊）中華書局
 森岡健二編著（1991）『改訂 近代語の成立 語彙編』明治書院
 湯志鈞（1993）『戊戌时期的学会和報刊』台湾商務印書館

- 沈国威 (1994) 『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容—』 笠間書院
- 荒川清秀 (1997) 『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に—』 白帝社
- 陳力衛 (1997) 「近代の辞書で調べる—漢語を中心に—」 『日本語学』 11 明治書院 pp.13-21
- 沈国威・内田慶市・熊月之・王揚宗 (1998) 『松下国際財団研究助成・研究成果報告書』
- 杉本つとむ (1998) 『近代日本語の成立と発展』 八坂書房
- 陳力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』 汲古書院
- 真田治子 (2002) 『近代日本語における学術用語の成立と定着』 絢文社
- 朱京偉 (2003) 『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に—』 白帝社
- 田島優 (2003) 「明治時代の漢語」 『日本語学』 第22巻 第13号 明治書院 pp.24-33
- 高野繁男 (2004) 『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法—』 明治書院
- 白南徳 (2006) 「明治新漢語の初出文献について—韓国側の資料を契機として—」 『広島大学大学院教育

学研究科紀要』 第二部 (文化教育開発関連領域) 55 pp.259-266

- 真田治子 (2007) 「書評：高野繁男著『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法—』」 『日本語の研究』 第3巻3号 (『国語学』 通巻230号) 武蔵野書院 pp.40-45

【引用文献】

- 『日本国語大辞典 第二版』 (2000~2002) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 小学館
- 『精選版 日本国語大辞典 全三巻』 (2006) 小学館国語辞典編集部 小学館
- 『大阪朝日新聞』 (1897年8月24日, 9月16日, 9月19日, 9月22日)
- 『大阪毎日新聞』 (1897年9月1日)
- 『神戸又新日報』 (1897年8月21日, 8月24日)
- 『時事新報』 (1897年9月7日, 9月8日, 9月9日, 9月11日, 9月26日)
- 『東京日日新聞』 (1897年9月17日)
- (主任指導教員 町 博光)